

社会人のための 英語の世界ハンドブック

酒井志延・朝尾幸次郎・小林
めぐみ 編

B5判・196頁
本体2,200円+税

[評者]
赤池秀代



今欲しい英語の情報が満載

こういう本が欲しかった、と思う人があちこちにいるだろう。中・高生向けのものはいくつかあったが、大人向けの、これほど豊かで深い情報が満載のハンドブックはなかったと思う。

このハンドブックは6章にわかっている。第1章「英語圏の国々を知ろう」、第2章「英米の生活を知ろう」、第3章「英米の文化を知ろう」、第4章「英語の広がりを知ろう」、第5章「ことばとしての英語を学ぼう」、第6章「英語の使い方を学ぼう」。各章末に異文化理解に関する多様なコラムが用意されている。

自分の興味ある分野を読むのもよし、知らなかつた分野の知識をざっくり得るのにもよし、さまざまなコラムでトリビアの知識を身につけるのもよし。いつでも誰でも楽しめ、生涯横に置いて学べる。

個人が特に気に入ったところをいくつか挙げる。

①(p.17) 「インディアン」という語は使用しないように気を付けていたが、この語がもつイメージが変わってきたという。最近のアメリカ先住民は、白人による収奪の歴史を記憶するためにも「インディアン」を積極的に使うそ

だ。やはり最新情報を知ることは大事だ。

②(p.137) 発音記号 // と [] の違いこの部分を読んで、ほっと安心した。両者の違いをわかりやすく解説してくれ、さらに、区別にこだわなくてよい、と学習する際の負担を減らしてくれる。

③(p.129) 国際的にみた日本人の英語能力に関して、「そうだ!」と思わず声が出たのは、「日本人の英語能力の低さを、とかく英語の教育技法の問題と考えがち」という箇所だ。

④(p.121) Estuary English（河口域英語）という最近知った語を見つけた。新しい情報は貴重だ。自分ではなかなか集められない。

唯一の不満は、情報が英米に少々偏っていることだ。日本で英語を学んだ後、実際に英語でコミュニケーションをとる相手は英語圏の人でないことが多い。ネイティブスピーカーでない人たちとのコミュニケーションの際の注意点にも興味がある。

「社会人のための」となっているが、中学・高校の生徒にも大いに役立つことだろう。「聖書」「ギリシャ神話」「シェイクスピア」「マザーグース」「ジョーク」「迷信」など英語に関する圧倒的な量の背景知識が凝縮されており、何十年も英語の世界探究の友となってくれるだろう。

このハンドブックを手にした読者は、さらに英語に関心をもち、英語の世界を広げたいという気持ちになるだろう。私もそのひとりだ。隅から隅まで読んだ。素晴らしいハンドブックに出会えた。

(あかいけ ひでよ・文教大学・

花咲徳栄高等学校講師)

動詞の「時制」が よくわかる英文法談義

宗宮喜代子・糸川健・

野元裕樹 著

四六判・192頁
本体1,500円+税

[評者]
藤田義人



動詞の「時制」が“本当に”よくわかる一冊

近年、英文法が苦手（？）な若い英語教師が増えているという噂を聞くが、それでもおおむね英語教師であれば英文法に興味をもっているだろう。評者も英文法は好きなほうで、これまで文法書は様々読んできたのだが、本書を読んでこれまでモヤモヤしていた考え方方がだいぶすっきりした。

例えば、「相」と言えば、評者は完了相と進行相を思い浮かべるが、本書を読むまで「単純相」という考え方を持ち合わせていなかった。また「法」については、本書で示されている「仮定法現在」の考え方が評者には新鮮かつ納得できるものであり、今後の指導に即採用しようと思った次第である。

本書は2部構成で、それぞれに3つの章がある。第1部では「時制と相」を扱い、現在時制と過去時制、単純相・完了相・進行相について詳しく説明している。第2部では「法と時制」を扱い、仮定法・直説法・命令法にそれぞれ1章ずつ割り当てている。

本文は大学3年生の健斗とゼミ指導教員の高橋先生との対話形式で書かれており、健斗が読者の気持ちを代弁してくれるよう話が

進み、その意味で読みやすい（ただし、健斗が「優秀すぎる」気がしないでもない）。また例文も豊富であり、関連する文法事項や日本語と対比させながら説明してるのでわかりやすい。英語史に言及した説明も読者を納得させる。さらに話が一定程度進むと【健斗のメモ】と称して簡単なまとめが書かれているので、その都度その章の流れを確かめながら読み進めることができる。

加えて、章の終わりには世界の言語を紹介するコラムが挿入されており、マレー語やタガログ語などの紹介を通して英語や言語一般の理解がさらに深まるような工夫がなされている。

以下に評者が興味をもった目次の見出しをいくつか列挙する。もし読者の皆さんも興味をもたれたら、是非本書を手にとってもらいたい。

- ・話者は「現実」と「現在」から逃げられない
- ・事態を外から見るために——単純相・完了相
- ・進行相と物質名詞は実は似ている？
- ・現実に基づかない非現実を表す——仮定法現在
- ・直説法なのに現実を表していない？
- ・なぜ命令法と仮定法現在に動詞の原形が使われるのか

1つだけお願いがある。本書では「態」については扱っていないが、時制・相・法について優れた説明をしている著者陣である。続編があるのであれば「態」を取り上げてほしい。

（ふじた よしひと・昭和学院秀英中学校高等学校 常勤講師）

[図解] 英単語イメージ辞典

政村秀實 著 Paulus Pimomo
英文校閲

B6判・738頁
本体3,200円+税

〔評者〕
阿部 一



イラストからイメージがわく楽しい辞典

現在、多くの教師にとって語彙指導はなかなかいい方法がないというのが本音だろう。教師によつては、語源を使って形態的な特徴にフォーカスを当てる方法や連語（collocation）をうまく生かす方法、あるいは特に基本語にフォーカスを当ててコア的なアプローチを試みる人もいる。しかし、本格的に積極的な「語彙指導」は今のところ未開拓の分野といつていいだろう。生徒にとって語彙力の増強は切実な問題であると同時に負担もある。それを少しでも軽減するために単語とその語義とのつながりをわかりやすく提示するなどの工夫を多くの人が重ねてきた。本書の著者は、早い段階から英単語の学習に図や絵を上手く使いながら、効率のよい単語学習や指導を考え、かつ実践されて来られた方である。

単語をイラスト化するというのは、子ども用の絵本などでは昔からあるが、それはあくまで具体的な名詞やわかりやすい形容詞、あるいは描きやすい動作動詞といったものであり、単語全体として扱うものはほとんどなかった。それは、単なる思い付きや感覚だけではなく、きちんととした裏

付けがある程度必要とされるからである。

本書は1,416語の重要語を取り上げ、それぞれの語義イメージをイラストで表し、それに単語の原義から現在使われている主要な意味に至る過程を簡潔に説明し、そのイメージがわきやすい高頻度の用例を載せたものとなっている。たとえば、わかりやすい例を挙げると、「押す」に当たる英語の代表的な動詞に press と push がある。本書で見ると前者では「押し続ける」、後者では「密着して圧力を加える、前へ推し進める」という説明にピッタリ合ったイラストを提示しているので、とても差異化がしやすくなっている。ただ、著者も述べられているように、ピタッとはまるイラストをすべて載せるのは至難の業で、特に、抽象性の高い語義や用法は展開しにくい感じがあるといえる。そういった制約などはあるものの、すべての見出し語に語義イメージ画を与えていたのは壮観で、見て楽しくかつ読みやすいのは大きな利点だろう。

今後も、学習者がパッと見たイメージを元に、特定の単語の意味（語義[sense]ではなく meaning）を把握できて、その単語を理解し、使いこなし、使い切ることを支援するガイドブックや辞典などは続いて出てくるであろう。その場合の鍵はイメージ画の扱い方と、適切かつ新鮮で生きのいい用例をどう揃えるかだろう。この辺りの見極めはとても難しく、本書のような試みは今後とも引き続きなされることになると思われる。その意味でも著者の先駆的な労作には敬意を表したい。

（あべ はじめ・英語総合研究所所長）